

発行：弘大病院広報委員会  
(委員長：水沼英樹病院長補佐)

弘前大学医学部附属病院広報誌

〒036-8563 弘前市本町53  
TEL: 0172-33-5111 (代表) FAX: 0172-39-5189  
http://www.med.hirosaki-u.ac.jp/hospital/

なんとう

# 南塘だより

第49号

(創刊：1994年12月15日)

※南塘とは、弘前市史によると医学部敷地内にあった南溜池のことをいう。

## 病院長からの一言～地域とともに発展の年に～

弘前大学医学部  
附属病院長 花田 勝美



平成20年最初の南塘だよりです。附属病院にとって本年は新外来診療棟の開業の年となりました。着工はわずか3年前ですが、30年前、すでに附属病院の開工工事を巡り、外来側から始めるべきか、病棟側から始めるべきかの議論がなされていたと聞きます。いずれにしても、今の私たちが偶然ながら新棟を使わせていただく稀有な機会が与えられた訳で、厳しかったな引越しの苦労も報われたと思います。弘前大学遠藤学長始め

弘前大学法人本部の皆様、病院職員の皆様には心から感謝とねぎらいの言葉を述べさせていただきます。

さて、この時期もうひとつ大事な報告があります。昨年は外来棟竣工に関連した5つの新システム導入のための経費をお認め頂きましたが、本年は別の意味でユニークな概算の内示をいただきました。以下にその概要を列記いたします。特別教育研究経費として、1. 総合医療情報管理システム(新規)、2. 医師不足分野等教育指導推進経費がつかまりました。とくに、後者では、ベテランの医員に対して新たに「病院助手」の新職種が誕生したことになります。これは、他の診療科にも拡大していきたいと考えています。特徴的なのは、特殊要因経費であり、勤務医の過重労働緩和目的として今年度は附属病院機能強化経費としてメディカルクラックを中心としたコ・メディカルスタッ

フの配置に配慮してくれたことでもすれば設備一辺倒であった国の支援策がやっとヒトにも目を向けてくれたということになります。遠藤学長の強い要請の賜物と考えております。基礎的運営費交付金としては、従来どおりの専門医研修・研修医経費が、また、施設整備費関連では、旧外来棟解体経費、看護師宿舍耐震改修が認められております。すっかり古くなった臨床研究棟の改修経費(医学部管理)も認められ、法人本部のご努力に感謝しなければなりません。地域の活性化にも大きく貢献することでしょう。

本年はねずみ年、干支の最初の年にあたり、心を新たにしたいと思いますが、ねずみは「行動力と財」の象徴とも言われます。ぜひ、附属病院の発展の年に致しましょう。  
(平成20年2月記)

## 先憂後楽

### 物議をかもし



副病院長(呼吸器外科・心血管外科)  
福田 幾夫

【物議を醸す】世間の人々の論議をひきおこす。(広辞苑)

「和をもって貴しとなす」、これは聖徳太子の言葉として、多くの日本人に好んで用いられています。この考えは、まるで日本人の遺伝子に組み込まれているかのように人々は言いますが、果たして真実でしょうか？聖徳太子の時代は、天皇の権力基盤が弱く、政権は豪族の連合体であり、豪族間の争いが絶えませんでした。だからこそ、太子は政治の理想として「争い」ではなく「和」を説いたのだらうと思います。実際、太子の没後、彼の一族は大和の有力豪族に攻められ、滅んでいきます。その後の日本の社会においても、政治の舞台では権力をめぐる闘争が続けられ、特に戦国時代は力のみが支配の原動力であり、「人間のエゴイズムがむき出しにぶつかり合った時代だったからこそ面白い」と司馬遼太郎は書いています。争いごとで乱れた時代に、リーダーが「和」を求めて人々をまとめようとする姿勢を、聖徳太子は「貴い」と考えたのではないかと思います。逆説的ですが「和をもって貴しとなす」とは、日本人の遺伝子にはない、ということだらうと思います。一方、安定期の政治家も、全く意味が異なる文脈のもとでこの言葉を用います。これは、一度確立した秩序を乱さないための方便であり、変革を拒む意味合いが大きくなってきます。人々の価値観や生活観が大きく変わり、人々と社会・組織の関係が変わりつつある今日、「和」を第一に説くのは、誤解を恐れずに言えば「時代錯誤」であり、社会が良い方向に変わってゆくことにブレーキをかける役割しか果たしません。新しい考え方や方法を尊重し、これを良い方向に向けてゆく、これが現在の日本の社会に必要とされていることではないのでしょうか。

現在、病院内の各部門を回って、病院の運営状況を説明し、皆さんからのご意見・ご要望を伺っています。時に厳しいご意見をいただくこともありませんが、全般的には皆さんまだ遠慮されているように思います。日本の伝統ある組織の最も大きな問題点は、皆さん公式の席では何も言わない、しかし陰で文句を言って負のエネルギーだけがたまってゆくことです。私達は現在、川の本真中に居るようなもので、立っているだけでは流れに押し流されてしまいます。流れに押し流されないように、川の上流を目指し続けること、これが私達の組織を良い方向に持ってゆく、唯一の方法だと思います。組織が変わるためには人が変わる必要があります。「変わらなきゃ！自分以外は・・・」というのではもうすみません。皆さん、どうか自分の意見を言って、病院が良い方向に変わってゆくために「物議をかもし」ください。「物議」の中から、病院がよりよい患者サービスと運営を行ってゆくための新しい方策が見えてくるのではないかと思います。

Risky to change. Riskier not to change  
(John Young, NASA宇宙飛行士)

## 各診療科の紹介【輸血部】

当輸血部は、品川部長、木村副部長はじめ5名のスタッフによって昭和56年に発足しました。現在は、福田幾夫部長を中心として、副部長1名、検査技師3名、看護師(兼任)1名、事務職1名の7名のスタッフで構成されています。

輸血部は院内で使用する血液製剤の発注、輸血に関する検査、供給といった業務が主体です。輸血に関する検査は、赤血球製剤の血液型ダブルチェック検査、患者血液型確定検査、不規則抗体スクリーニング検査、クームス試験、交差適合試験等年間3万件以上の検査を施行しています。緊急出血に対する院内採血(スペンダー血)の感染症検査・放射線照射等の業務も担っています。

輸血部の使命は、院内の安全な輸血治療体制の構築・安全な血液製剤の供給です。輸血医療の進歩は、輸血なしには救命できなかった疾患や外傷患者に多大な福音をもたらしまし

た。その一方で、輸血後肝炎、凝固因子製剤による薬害エイズ、フィブリノゲン製剤によるC型肝炎問題など重大な障害を引き起こしました。本当に必要な患者に必要な最小限の輸血を安全に供給することが輸血医療の最大の課題です。輸血部では病院内の緊急輸血時の対応マニュアルを整備したり、24時間輸血検査体制を検査部と共同で整備したりといった努力を続けています。また患者様が輸血を受けられた後の輸血後感染症検査フォローアップ体制の強化を推進しています。今後は、自己血輸血を啓蒙し、輸血部が自己血採血に積極的に参画して患者様の採血・保存管理を行うよう準備を進めたいと思っております。また輸血業務の効率化を図るために血液型不規則抗体スクリーニング法(Type & Screen法)と最大手術血液準備量(MSBS)を採用したいと考えておりますので、皆様のご理解とご協力が得られるよう



準備してまいります。

現在院内では、より安全に輸血治療が行われる体制が順次整備されてきていますが、各診療科ならびに各部署と協力してより一層の努力をしていきたいと考えております。今後ともご支援ご協力をお願い致します。  
(輸血部副部長 玉井佳子)

## 新任教授の自己紹介



腫瘍内科科長 西條 康夫

この度、平成20年1月1日を持ちまして、新設された弘前大学医学部附属病院腫瘍内科を担当することになりました西條康夫です。どうぞ宜しくお願いいたします。

私は、福島県須賀川市という片田舎に生まれ、1984年に新潟大学医学部を卒業しました。大学卒業後2年間の内科研修を経て、呼吸器内科専門医を目指し、1986年東北大学抗酸菌病研究所(現：加齢医学研究所)内科学教室に入局し、呼吸器内科医としてトレーニングを開始いたしました。

入局以来、2年8ヶ月のアメリカ留学と短期間の一般病院勤務以外は東北大学で臨床と研究を行って参りました。入局当初に比べ、年々肺癌が増加し、呼吸器内科の診療・研究の中心は、感染症や生理学から癌や分子生物学へと変わってきました。私は、一時基礎系の研究室に籍を置きましたが、臨床への復帰を希望していた

経緯より、今回新設されました腫瘍内科を担当することになりました。

私が肺がんを診療するようになってほぼ20年が経ちましたが、最近まで肺癌の内科的治療はなかなか進歩しませんでした。しかし、分子標的治療薬であるgefitinibが登場し、肺癌治療は大きく変貌し、さらに、他のがん腫同様新たな分子標的薬が次々と導入されようとしています。

いわゆる「腫瘍内科」は、今まで臓器別に診療されていたがんを、「がん薬物療法」(化学療法)を通して、臓器別診療を超えたがん診療をする診療科です。ですから、基本的にはがんの診断は各科にお願いし、当科ではがんの内科的治療を担当することになります。当科は新設されたばかりで診療を開始して間もないため、スタッフは私を含めて3人と少ないですが、消化器内科・血液内科・膠原病内科の化学療法グループの優秀なスタッフが参加してくれました。従来化学療法グループが担当していた消化器系悪性腫瘍や悪性リンパ腫に加えて肺癌を中心とした胸部悪性腫瘍も診療を開始しています。これからスタッフと力を合わせて、弘前大学医学部附属病院そして青森県のがん診療に貢献できるように頑張りたいと思いますので、今後のご指導・ご鞭撻をよろしく願います。

## 禁煙講演会を開催



附属病院敷地内が昨年10月1日から全面禁煙になったことに伴い、喫煙教職員への禁煙支援の一環並びに病院所属の教職員へタバコ被害を再認識してもらうため、平成19年12月13日臨床大講義室にて医学研究科循環器呼吸器腎臓内科学講座 准教授 高梨信吾による禁煙講演会が開催されました。

(総務課)

## 平成19年度

## 弘前大学医学部附属病院診療奨励賞授賞式が行われる



第10回附属病院診療奨励賞授賞式が、医学部学術賞及び医学部医学科国際化教育奨励賞授賞式と共に、2月1日に医学部コミュニケーションセンターにおいて執り行われ、受賞者に花田病院長から本賞の楯及び副賞として(勲)弘仁会から奨学寄附金が贈呈されました。今年度は診療技術賞としてリハビリテーション部(塚本利昭)の「投球障害肩・野球肘に対する投球フォーム指導による治療」、麻酔科、手術部、集中治療部(代表 北山眞任 外6名)の「携帯型超音波画像診断装置を用いた末梢神経ブロックへの応用技術ーランドマーク法から視覚的穿刺法へー」また、心のふれあい賞は看護部二病棟8階、神経科精神科(代表 相馬美香子 外17名)の「精神疾患患者に対する園芸作業と院内美化」の3主題が受賞しました。授賞式に引き続き、祝賀会が同センター内にて和やかに行われました。

(総務課)

## 投球障害肩・野球肘に対する投球フォーム指導による治療

○診療技術賞を受賞して

リハビリテーション部 塚本 利昭

この度は診療技術賞をいただき、誠にありがとうございました。

多くの野球選手が経験する投球障害肩や野球肘の治療は、消炎鎮痛剤などの対症療法が主であり、観血的治療を行っても競技への復帰が困難な選手が多くみられるなど、効果的な治療が少ない状況となっています。そこで、投球障害肩や野球肘を根本的に治療するためには、障害を惹起するに至った投球フォームを分析し、解剖学的・運動学的に障害を起こしにくく、パフォーマンスを高める投球フォーム指導が必要と考え、約4年間に観血的治療を含め150名以上の選手に対し投球フォーム指導と理学療法を行った結果、多くの選手が競技復帰しております。

最後に、この賞へご推薦いただきました藤哲教授、多大なるご支援・ご指導をいただきました石橋恭之准教授、ならびに青森労災病院整形外科部長佐藤英樹先生、そして常に私を支え鼓舞してくれる理学療法スタッフにこの場をお借りし心から感謝申し上げます。

## 携帯型超音波画像診断装置を用いた末梢神経ブロックへの応用技術ーランドマーク法から視覚的穿刺法へー

麻酔科

北山 眞任, 橋本 浩, 吉田 仁, 榎方 哲也, 木村 太, 石原 弘規, 廣田 和美

○診療技術奨励賞を受賞して

代表 麻酔科 北山 眞任

この度は、診療技術賞を受賞させて頂き、ありがとうございました。グル

ープを代表して心より御礼申し上げます。

超音波ガイド下末梢神経ブロックは、神経とその周辺組織の構造や穿刺針を描出して局所麻酔薬の拡がりを同時に確認でき、成功率や安全性の向上が期待されます。全国的に下火となっていた神経ブロックによる鎮痛が、近年、急速に注目されています。本院では、2006年からこの方法を全身麻酔に併用した術後鎮痛法を導入し、開腹手術、下肢手術、小児ヘルニア手術の術後鎮痛に良好な結果を得ています。中枢作用の少ない区域麻酔の併用は、麻薬単独での術後鎮痛に比べて、術後の早期覚醒・早期離床の観点からも重要な役割が期待されます。今回の受賞を励みとしてさらに手術患者の術後鎮痛の質的な向上を目指して努力したいと思います。

## 精神疾患患者に対する園芸作業と院内美化

看護部

相馬美香子・岩崎 洋子・野呂 育世・  
小山 陽子・森 正子・伊藤 純子・  
伊藤 敏子・菊池 真美・増田 艶子・  
三浦 恒子・千葉 悦子・山田 育代・  
對馬 政子・外崎えつ子・小崎 牧子・  
五十嵐加奈子・大澤 豊神経科精神科  
古郡 規雄

○心のふれあい賞を受賞して

代表 第二病棟8階 相馬 美香子

この度は、診療奨励賞・心のふれあい賞をいただき、誠にありがとうございました。病棟を代表し、心より感謝申し上げます。

精神疾患を持つ慢性患者さんは、日々を何となく何もしないで過ごすことで、社会生活を狭め、かつ内的過程に浸ることで疾患の進行や再発を呼び起こすと言われていています。

今回、園芸作業を通して、患者さんの社会的交流や心の豊かさの向上を図りながら治療効果を上げていくことを目的に、平成19年6月から10月まで園芸作業を行いました。病院敷地内にある花壇の草取りから始め、苗や球根を植え、水をやり、花を成長させるという園芸作業を通し、育てる喜びと社会的な活動をする楽しさを体験していただきました。患者さん数名と病棟スタッフが同じ場所で同じ体験をすることで、協調性や順応性が引き出され、やがて自律性も養われていきました。中には表情や態度が作業後には自信にあふれたものとなるなど、確実に変化が目に見えるようになり、結果として退院が早まったケースもありました。

退院時には患者さんに、看護スタッフ手作りの「花壇チーム認定証」をお渡ししました。これは患者さん自身が社会の役に立っていることを自覚してもらい、自信を持って退院後の生活を送って頂きたいとの願いを込めて作られたものです。患者さんやご家族の方からは大変喜ばれ、涙を流す方もいらっしゃって、その光景から私たちも胸が熱くなりました。

患者さんからは、退院後も外来通院しながら、この園芸活動を続けたいという声も聞かれました。今後もこの活動を継続し、患者さんのQOLを高めるとともに、残っている空き地にも園芸活動を展開していけたらと考えております。

## 平成19年度国立大学病院長会議東北・北海道地区会議を開催

国立大学病院長会議「東北・北海道地区」会議が1月24日弘前大学が当番校となり同大医学部コミュニケーションセンターで開催されました。

会議には、北海道、旭川医科、東北、秋田、山形及び弘前の6大学の病院長と事務部長、担当課長が参加しました。

開催に当たり、弘前大学の花田病院長の挨拶の後、花田病院長が議長に選出され「医療機関等における医療機器の立合いに関する基準への対応について」「院内暴力に対する対応策について」協議が行われ、「期限付コ・メディカル職員への正規職員化等の導入状況について」「未収金対策としてのクレジットカード払いの議論、意見交換が活発に行われました。

会議後行われた懇親会では、和やかな雰



囲気のもと、高度救命救急センターを東北地区でいち早く設置し、運営している東北大学病院長と情報交換が行われ、今後に実りあるものとなりました。次回当番校は北海道大学。(総務課)

## 公益信託あおもり高度先進医療基金(健吾ちゃん基金)感謝状贈呈

公益信託あおもり高度先進医療基金(受託者・みずほ信託銀行、信託代理店・みちのく銀行)から助成金が贈られたことに伴い、感謝状の贈呈式が2月5日病院長室において、移植医療研究センター長(泌尿器科)の大山教授同席のもと行われました。

同基金運営委員会の委員長を務める今充弘名誉教授から目録が贈呈され、花田病院長からは感謝状が手渡されました。

同基金は本院で行われた県内初の生体肝移植手術の際、治療費として寄せられた基金を基に1995年に設立され、肝移植などの高度先進医療を必要とする患者や研究に役立てられてきました。現在は治療の多くに保険が適用されるようになったことや基金も少なくなったことから、今回本院に残額6,444,527円全てを助成し、



13年間の活動に幕を閉じたものです。花田病院長から、本院は移植、再生、再建医療に大きな力を注いでおり、助成金は今後教育、研究、診療に役立てていきたいと感謝の言葉が述べられました。(総務課)

## 新外来診療棟での診療を開始

平成16年度から建設工事を進めてきた新外来診療棟が平成19年9月に竣工し、平成20年1月7日から診療を開始しました。

新外来診療棟は地下2階・地上5階建てで延べ床面積は17,083㎡、1階中央待合ホールは5階までの吹き抜け構造で、明るく開放的なレイアウトになっています。

各診療科の受付は、関連の深い診療科を組み合わせた内科、外科などの総合「ブロック受付」を設け、ディスプレイを使った患者案内システムを採用しています。

地下1階には、中央カルテ庫を設け、これまで各診療科別に保管していた外来カルテのうち、約30,000冊を一元管理し、最新のカルテ管理システムにより、必要なカルテの高速検索及び自動取り出しが可能になりました。

新外来診療棟のオープンを前に、診療科及び事務部の移転や「1患者1カルテファイル」方式導入のためのカルテ合冊



作業を、外来診療終了後の年末年始の期間に関係業者の協力を得ながら病院職員総出で行いました。1月7日のオープン初日には、新システムに不慣れな患者様がスムーズに受診出来るように、多数の案内係やシステムのトラブル等への対応者を配置し、1,300人を超える外来患者様への対応にあたりました。(医事課)

院内コンサート

## 「日野美歌・渡辺幹男アコースティック」の開催

1月25日、入院中の患者サービスの一環として、オープンしたばかりの外来診療棟で、「エフエム青森」の公開録音による院内コンサートを開催しました。

今回は、「氷雨」などのヒット曲で知られる歌手の日野美歌さん、日本唯一のブラジルサウンド・ギタリストとして名高い渡辺幹男さんをゲストに迎えてのコンサート。

花田病院長の挨拶に引き続き、5階まで吹き抜けの開放的な外来待合ロビーに、日野さんの魅惑的な歌声と渡辺さんのアコースティックギターが奏でる絶妙なハーモニーが心地よく流れて、染みこんで行く。

日野さんは、病院でのコンサートは初めて、とのことでしたが、「氷雨」など9曲を、ハスキーボイス・トークをはさん



で歌い上げ、詰めかけた約150人の入院患者さんらを魅了。包み込むような歌声とガットギターの懐かしい旋律に、感動と癒しの広がる楽しいひとときでした。(医事課)

## 【編集後記】

年度末の慌ただしさのなか、『南塘だより』第49号をお届けします。ご多用のところご投稿賜った皆様方にお礼申し上げます。

所謂三点セットの①新外来診療棟オープン②病院情報管理システム移転③外来カルテ集中管理システムの稼働から3ヶ月。顧みるに、よくも大胆、果敢にやり遂げたものだ。院内もひ

と頃の狂騒からようやく落ち着いた感を取り戻した感があります。

年末年始の休暇返上も今では少しく懐かしく思い出されます。ただPTSDだけはきっちり残り残りました。

この時期はまた、人事異動の季節でもあります。さまざまな想いが交錯します。かくいう私もこの3月末で定年退職。お世話になりました。附属病院のますますの発展を祈って止みません。(広報委員 石崎 孝志)